

保育所が行う家庭との連携・協働プログラムの実証・研究 ～イベントサークル等の調査～

研究代表者	廣瀬 優子	（しせい太陽の子保育園 園長）
主な執筆者	和田上 貴昭	（目白大学 准教授）
共同研究者	乙訓 稔	（武蔵野学院大学 特任教授）
	松田 典子	（文教大学 専任講師）
	高橋 久雄	（社会福祉法人至誠学舎立川 常務理事）
	三浦 修子	（至誠第二保育園 園長）
	長谷川 育代	（万願寺保育園 園長）
	高橋 滋孝	（至誠あずま保育園 園長）
	高橋 智宏	（至誠いしだ保育園 園長）
	高橋 紘	（至誠保育総合研究所 所長）

研究の概要

本研究においては、保育所における行事を通して行われる保護者との信頼関係の形成について着目し、同一法人の運営で同一自治体に設置された5つの保育所の保育士54人とそのうち一つの保育所を利用する保護者10人を対象に質問紙調査を行った。

質問内容は、「イベントサークル」および保育園のその他の行事に対する認識、記入者の属性および保護者へのかかわりの状況についてである。イベントサークルとは保育所で行われる保護者主催の行事である。質問紙の行事については、その保育所で実際に行われている行事4つについて名前を挙げて質問した。

調査の結果、保育所が保護者との信頼関係を形成していくための方法として行事は有効な手段の一つであることが明らかになった。日常的なかかわりの中で行われる子育て相談については、保育士が認識しているほど保護者は肯定的に捉えていなかった。保育所調査の自由記述において、保育士は行事を行うことで保護者と保育所との間に信頼関係が形成できると考える傾向があったが、その具体的な方策についての記述は見られなかった。行事を行うことで保育所との関係性が深まる傾向にあるものの、それを子育ての相談につなげていくためには、さらなる取り組みが必要となる可能性がある。

また、単に行事を行うことで関係が構築されるのではなく、保護者が主体的に行事に関わるかが重要である。「イベントサークル」のように保護者主催で保育所が支援する形態の行事は、その点で有効であり、行事を通して保護者と連携・協働していく関係を構築することが可能になってくる。ただし行事のみでこうした関係性が構築できるのではなく、日頃から保護者とのかかわりに対して積極的に行うことや、保育士の経験年数に応じた適切なかかわりが重要になると考えられる。

キーワード：イベントサークル（保護者主催行事）、信頼関係、保育者の経験年数、保護者の主体性、保育士の専門性

1. はじめに

核家族化や少子化、地域内での子育て家庭の孤立などの流れの中で、社会における子育てを取り巻く環境は深刻化し、子育て家庭だけで子育てをすることは困難になっている。2015年度から開始された子ども・子育て支援新制度では、地域の状況に応じた多様な保育サービスの提供の方策が取られているように、子育てに対する社会の支援は必須となっている。中でも保育所が子育てにお

いて果たす役割は重要であり、多岐にわたる。日中の保育のみならず、近年は保護者や地域の子育て家庭への子育てに関する情報提供や相談などへの対応が必要とされている。こうした取り組みを担う保育士の専門性についても広がりを見せており、特に保護者に対する子育て支援について重要視されている。現行の保育士養成カリキュラムにおいても「家庭支援論」や「保育相談支援」が必修科目として新設されている。保育所を利用する保護者が安心して子どもとかわることができるような取り

組みを行うためには、保育所および保育士の専門性の向上とその広がりが必要となる。

2. 先行研究

(1) 保護者との関係形成をする機会

『保育所保育指針』第1章総則に、「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている。」とあるように、保育を通じて子どもの健全育成を行っていくためには、保育所および保育士と保護者が互いに連携を図り、互いの理解を深め、信頼関係を構築していくことが不可欠である。

首都圏の未就学児童を持つ保護者を対象とした調査(ベネッセ教育総合研究所2015)では、「保育所を選ぶポイント」として「園長や職員が信頼できる」という項目が41.7%と高い割合を示している。これは全項目の中でも3番目に高い割合である。同様の他の調査(住田ほか2012)でも、「幼稚園・保育所を選んだ理由(保育所)」において「先生たちが信頼できる」が39.0%と高い割合を示している。しかしながら保護者と保育所の保育者が接することができる時間が多くない。松尾(2015)の保育所604カ所の施設長を対象とした調査によれば、「子どもや保護者に対する日々の連絡(連携)方法」として「送迎時に保育士と保護者が直接会話する」94.5%、「連絡帳に記載」92.3%、「クラス内の連絡ボード」45.9%、「掲示板」60.9%、「メール」17.7%、「その他」15.5%となっており、多くの保護者は、保育者との関わりが日々の送迎の際の短い時間や、連絡帳、掲示に限定されている。

亀崎(2015a)は、保護者が保育所に対して信頼を得るためには、こうした限られた機会を十分に活用する必要があるとしている。連絡帳を通じた情報交換も送迎時の対応と同様に保護者からの信頼を得る機会となることを明らかにしている。

林(2015)は、保育所における保護者との連絡帳のやり取りの内容(1年分)について、保育の過程の質の観点から、その要素とされる保護者と保育者の関係性の変容過程に注目し記述内容の分析を行っている。その結果、子どもの育ちを保護者と保育者双方が共有することで、保護者と保育者の相互理解が促進されていく過程が確認されている。このことにより、連絡帳は保護者支援の重要な方法の一つとなり得ることが明らかとしている。さらに連絡帳のやりとりが子どもの生活全体の理解につながることで、保育者が適切な保育を行うことにも寄与していることを明らかにしている。

中平ら(2014)は、信頼を得る機会について、①登降園時の関わり、②保育連絡帳等、文面での伝達、③園便

り・学級便り、④家庭訪問・個人懇談の4つに整理し、それぞれの機会に保護者の信頼を得ることが必要であるとしている。

保護者とのより良い関係形成をするためには、送迎の際の挨拶や連絡帳のやり取りなど様々にあるが、日々の交流の際に、意図的に保護者との関係形成を図る工夫をする必要があることがこれらの先行研究から明らかになっている。そこでのかかわりは、保護者と保育士の関係形成に寄与するばかりでなく、保護者の保育内容への理解や、保育士の子どもの生活理解にもつながる。また、先行研究では日常的な送迎時のかかわりや連絡帳などがその手段としてあげられている。

(2) 保護者との関係形成における課題

住田ら(2012)は、保護者の幼稚園・保育所に対する希望や認識などの調査を行っている。その中の「幼稚園・保育所に期待すること(保育所)」の「子育ての相談の機会を作ること」は「とても期待する」28.5%、「期待する」57.7%となっている。「保護者同士が交流できるような機会を作ること」は「とても期待する」19.5%、「期待する」58.5%となっている。

須永ら(2010)における保育所の保護者を対象とした保育ニーズに関する調査では、「保育士や職員に対して」の中において見出された要望や不満について、下記の7つに整理している。①保護者に対する対応への不満(「話ししかけてほしい」、電話での対応、職員間のばらつきなど)、②保育以外の内容(親同士の悪口をきかせる、職員にプライベートな付き合いを求めるなど)、③保育所での子どもの様子が知りたい、④トラブルへの対応に不満、⑤子どもへの対応(子ども同士のトラブルに対する職員の対応や新任保育士の子どもへの対応など)、⑥担任保育士とのコミュニケーション(延長保育などで、送迎時に担任とコミュニケーションがとれないなど)、⑦専門性を要するニーズ(障がいのある子どもの就学相談など)である。こうしたニーズの背景には「保護者の権利意識」や「自己中心的」、「子育ての負担感・不安感」などがあるとし、「これまで以上に保護者への連絡や関係のあり方が重要になる(須永ら2010, 102)」ことを指摘している。同時に「保護者との対応について保育所としての十分な体制はもちろん、それに対応できる保育士一人ひとりの資質向上も不可欠である(須永ら2010, 102)」とし、保護者との関係形成、保育所の体制、保育士の資質が保護者の保育ニーズに応えるために必要な事柄であるとしている。

亀崎(2015b)は保育所保育士の保護者対応に関する困難性(保育相談支援の困難性)について、①保護者自身が持つ課題性(自己中心性や養育態度、家族関係等)、②子どもに対する共通理解の構築の難しさ、③保育士自身の認識(家庭養育に対する認識と家族への援助志向)、④保育システムの課題(利用者の過剰な権利要求や保護

者とのかかわりの時間の取りづらさ)の4点に整理している。特に4点目の保護者とのかかわりの時間の取りづらさについて、「保育の長時間化によって保育士の雇用形態や勤務時間は多様化し、時差出勤による複雑な勤務形態となっている。こうした中では、勤務時間の異なる保育士同士が情報を共有し、一人ひとりの保護者に細やかに対応することは難しく、時間帯によって担当者が次々と交代する状況の中で、保護者一人ひとりに丁寧にかかわることは容易ではない(亀崎2015b, 4-5)。」とし、保護者とのかかわりが現在の保育所の勤務形態の中では十分にとりづらいことを指摘している。

これらの研究から、保育士が保護者との信頼関係の形成を行うには多くの課題が存在することがわかる。ただしこれらの課題の多くは保護者と保育者の認識の違いなどから生じるため、保護者と保育士が共通認識を持てるような信頼関係の構築が必要であると考ええる。

(3) 保護者との関係形成と保育者の経験年数

保育所における保護者と保育士の信頼形成について、中平ら(2014)は、保育所の送迎時における保育者の対応について、新任保育士と中堅保育士、熟練保育士の対応事例の考察から、保育現場の経験の長い中堅保育士や熟練保育士の方が、保護者の気持ちに配慮した対応ができることを見出している。具体的には、「経験年数が短いほど、保護者対応に苦手意識を持っており、対応したいという思いはあるが、行動に移せないことが多い(中谷ら2014, 69)」」。それに対して、「中堅保育士や熟練保育士は、全体の状況を把握する力があり、保護者の態度、表情に素早く反応し、子どもの利益を考慮した上で、保護者に対応している(中谷ら2014, 69)」。背景には、中堅・熟練保育士の方が新任・若手保育士よりも保護者と関わり合う機会が多く、保護者との信頼関係を築きやすい状況にあることを指摘している。しかしながら一方で、若手保育士は、経験年数は短いものの担任という立場から、保護者と日々の関わりを通して信頼関係を構築し、保護者対応を円滑にしようとしていることも明らかにしている。経験年数により保育士は保護者との関係形成の方法が異なると言える。

吉田ら(2015)は、保育者189人を対象とした質問紙調査において、経験年数による保育場面での気づきの違いについて調査を行っている。保護者との関係においては初任保育者や中堅保育者より熟練保育者の方がやや多くの気づき体験を得ていることが明らかになっている。熟練保育者は、保護者からの信頼が得やすく、子育てに関する相談を受ける機会が増えるため、保護者との共通理解の中で保育を行っていくことの大切さに気付くとしている。さらに、自分自身の子育て経験から保護者の立場や気持ちをより理解するようになったことが記されているとしている。これらのことは、熟練保育者が「保護者との関わりを深める」場面とおよび「保護者の子ども

の思いに寄り添う」場面における気づきが多くなっている理由であるとしている。

全国保育士養成協議会(2013)が行った全国の保育所、乳児院、児童養護施設の勤続10年以上の保育士を対象とした調査においては、保育士としての専門的知識・技能は段階的に獲得されるため、経験年数により獲得されている専門性が異なることが明らかになっている。この調査の結果において、「個々の状況に応じた保護者支援の方法を考えることができる」や「子育て家庭に対する相談支援をすることができる」などの質問を含んだ「家族支援・地域連携」の項目についての保育所保育士の専門的知識・技能は、5年以上の現場経験を経て獲得されると認識されている。これは他の「保育内容」などの専門的知識・技能と比較して大幅に遅く、保育現場における経験年数を得ていないと獲得できない専門的知識・技能であるということがわかる。

上記のように、保育現場における経験はその保育士の専門性を高め、幅広いものにしていくだけでなく、経験を積むことで、保護者からの信頼を獲得しやすくし、またその役割を保育所な中で果たさざるをえなくなる立場に立つことから、さらに保護者とのかかわりが多くなる。保育所の保育士が保護者との信頼関係の形成を行う上では、保育士の保育現場における経験年数を踏まえた対応を行う必要があると考えられる。

3. 研究の目的

保育所における保護者と保育所(保育士)の信頼関係を構築するためには、日々のかかわりにおける意図的なかかわりが必要である。しかしながら、行事を保護者と保育者の関係形成の場として捉える研究はほとんど見られない。運動会や保護者参観などの行事は、日々の送迎以外で保護者が保育者と接する機会となる。日々の送迎とは異なり、時間的な余裕があることも多い。特に保護者が主体となり企画運営する保育所の行事である「イベントサークル」は、保護者自身による積極的な参加が見込まれ、職員との信頼関係の形成を行いやすいと考えられる。

行事はどの保育所においても開催されているものの、保護者との信頼関係の形成を行うことを目的として開催されていることは少ない。本研究においては、行事を保護者と保育所の信頼関係を形成する機会として着目し検証することを目的とする。中でも保育所を利用する保護者による主体的な活動である「イベントサークル」の取り組みの検証を通して、保育所が子育ての共同者として保護者との信頼関係の形成のためにはどのような取り組みを行うことが有効かについて明らかにする。

なお「イベントサークル」は、本研究の調査対象となっている保育所において10年以上実施されているもので、保育所を利用する保護者が主体的に企画・運営にかかわ

る行事をいう。保育所はその行事に対して補助的な役割を果たし、保護者と保育所が共に行事を運営していくものである。毎年、保護者から「これがしたい」との希望が出され、企画・実施されている。保護者が主体的に関わり、保育所との連絡を密に行っていく。対象は保育所を利用する子ども達とその保護者であり、自由参加としている。河原でのバーベキューや宿泊を伴うキャンプ、キャンドル作りといった工作教室など、内容は多岐にわたる。これらの実施経験から、保護者との関係形成にイベントサークルは有効であろうとの仮説を立て、調査を行うこととした。

4. 調査の方法と対象

本研究においては、保育士と保育所を利用する保護者を対象に質問紙調査を行った。保育士に対する質問紙調査は、東京都内の同一の自治体の概ね1.5km圏内にあるA～Eの5つの保育所(図表1参照)を対象に行った。この5つの保育所は同一の社会福祉法人により運営されており、保育内容や保護者対応において同一の理念、方法に基づいて行われている。

質問内容は、「イベントサークル」および保育園のその他の行事に対する認識、記入者の属性および保護者へのかかわりの状況についてである。行事については、その保育所で実際に行なわれている行事4つについて具体的な名前を挙げて質問した。行事はA保育所(イベントサークル、運動会、〇〇まつり、ブルーベリー狩り)、B保育所(夏まつり、イベントサークル、懇談会、運動会)、C保育所(イベントサークル、夏まつり、親子遠足、運動会)、D保育所(〇〇夏まつり、イベントサークル、親子遠足、運動会)、E保育所(〇〇まつり、育児講座、保育参観、運動会)である(行事名についている〇〇はそれぞれ異なる固有名詞がつく)。

それぞれの行事に対して、「保護者が楽しめる」、「園児が楽しめる」、「保護者の負担になる」、「保護者同士が仲良くなる」、「自分の子ども以外と親しくなれる」、「保育士に話しかけやすくなる」、「保育園に親しみがわく」、「子育ての相談をしやすくなる」、「子どもの成長した姿が見られる」の7つの質問を4件法(そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない)で聞いた。これらの質問内容は、保育所で現在施設長をしている(またはしていた経験を持つ)6人により、質問項目を出し整理したものである。

保護者へのかかわりの状況については、「登園時や降園時に保護者との挨拶を積極的に行っている」、「自分が担当するクラスのすべての保護者の顔が分かる」、「連絡帳を通して、園児の日中の様子について伝えている」、「降園時などに、保護者に園児の日中の様子について伝えている」、「降園時などに、保護者と園児にかかわりのない雑談をしている」、「降園時などに、保護者と子

育てに関する話をしている」、「保護者から、子育てに関する愚痴をきくことがある」、「保護者の、子育ての相談に助言することがある」である。これらの質問項目については、「生徒の教師に対する信頼感尺度」(中井ら2008)など、信頼感に関する心理尺度の質問項目を検討し、作成した。

実施日は平成27年10月26日および10月27日の2日間で、職員に事前に質問紙を配布し、記入したものを調査者が内容確認しながら回収した。調査時間帯に勤務している職員すべてを調査対象とした。なお倫理的配慮および回答内容の偏りを防ぐため、調査者は保育所の法人に関係しない第三者(大学教員)が個別に質問紙に関する説明をした上で行った。調査協力者数は調査時に勤務していた職員すべてで、54人である。

図表1：調査対象の保育所

保育所	常勤数	非常勤	定員数	在籍園児数
A	26人	19人	106人	120人
B	14人	11人	45人	53人
C	15人	11人	60人	63人
D	12人	15人	45人	52人
E	21人	23人	100人	118人

一方、保護者調査は上記5つの保育所のうち、「イベントサークル」が活発に行なわれているC保育所を利用している保護者とした。中でも行事などの活動に積極的な保護者10人を任意で選び、回答していただいた。保育所の施設長より直接保護者に説明し、配布、その場で記入して頂き、回収した。質問内容は保育士への質問紙と同様のもので、一部表現を保護者向けに変更したものである。

5. 調査結果の概要

(1) 行事に対する認識

保育士を対象とした調査は、運動会などの保育所が主体で行う行事(保育所主催行事)と、イベントサークルなどの保護者が主体で行う行事(保護者主催行事)に分類した上で分析を行った。それぞれの参加経験(延数)は、保育所主催行事が142名、保護者主催行事が63名であった。なお分析には統計ソフト(IBM SPSS Statistics Base Grad Pack Ver.23)を使用した。

職員のそれぞれの行事に対する認識についてt検定を行ったところ、「保護者が楽しめる」($t=3.167$, $df=155.935$, $p<.01$)、「園児が楽しめる」($t=2.561$, $df=191.203$, $p<.01$)、「保護者同士が仲良くなる」($t=1.886$, $df=195$, $p<.05$)、「子どもの成長した姿が見られる」($t=-3.121$, $df=85.441$, $p<.05$)において有意差が見られた。そのうち、「保護者が楽しめる」、「園児が楽しめる」、「保護者同士が仲良くなる」の3項目につ

いては、保護者主催の行事において「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の割合が多く、「子どもの成長した姿が見られる」においては、保育所主催の行事において「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の割合が多いとの結果であった。一方、「保護者の負担になる」「自分の子ども以外と親しくなれる」、「保育士に話しかけやすくなる」、「保育所に親しみがわく」、「子育ての相談をしやすいになる」に関しては有意な差は見られなかった。総じて「保育士に話しかけやすくなる」、「保育所に親しみがわく」、「子育ての相談をしやすいになる」といった、保育所との信頼関係の形成に有効であろうと考えられる項目は、行事の開催が有効に働くであろうとの認識を職員が持っていることが明らかになった。

保護者を対象とした調査においても同様に、t検定を行ったところ、「保護者が楽しめる」($t=-3.477$, $df=55.728$, $p<.01$)、「保護者同士が仲良くなる」($t=1.886$, $df=195$,

$p<.05$)、「保育士に話しかけやすくなる」($t=-2.723$, $df=78$, $p<.01$)、「保育園に親しみがわく」($t=-4.074$, $df=78$, $p<.01$)、「子育ての相談をしやすいになる」($t=4.276$, $df=39.193$, $p<.01$)において有意差が見られた。「保護者が楽しめる」、「保護者同士が仲良くなる」、「保育士に話しかけやすくなる」、「保育園に親しみがわく」については、保育士が認識している以上に保護者が行事を肯定的に捉えていることが明らかとなった。一方、「子育ての相談をしやすいになる」については、平均値（そう思う=4、どちらかといえばそう思う=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1で計算）においても保育士3.11に対し保護者1.66と大きな差がでた。保育士が認識しているよりも保護者は行事によって「子育ての相談をしやすいになる」とは考えていないことが明らかとなった。

図表2：行事に対する認識（保護者主催・保育所主催別）

	保護者主催			保育所主催			合計		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差
保護者が楽しめる	3.83	60	.376	3.65	166	.560	3.70	226	.523
園児が楽しめる	3.93	60	.252	3.79	163	.623	3.83	223	.552
保護者の負担になる	1.97	60	.780	1.95	166	.933	1.96	226	.893
保護者同士が仲良くなる	3.70	60	.561	3.52	166	.667	3.57	226	.644
自分の子ども以外の子とも親しくなれる	3.50	60	.567	3.25	161	.873	3.32	221	.809
保護者が保育士に話しかけやすくなる	3.47	60	.676	3.39	166	.865	3.41	226	.818
保護者が保育園に親しみがわくようになる	3.55	60	.594	3.55	166	.674	3.55	226	.653
保育士に子育てなどの相談をしやすいになる	3.33	60	.705	2.77	166	1.137	2.92	226	1.068
保護者が子どもの成長した姿が見られる	3.20	60	.935	3.58	166	.764	3.48	226	.828

図表3：行事に対する認識（保育士・保護者別）

	保育士			保護者			合計		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差
保護者が楽しめる	3.66	197	.543	3.93	29	.258	3.70	226	.523
園児が楽しめる	3.81	194	.585	3.97	29	.186	3.83	223	.552
保護者の負担になる	1.99	197	.851	1.72	29	1.131	1.96	226	.893
保護者同士が仲良くなる	3.55	197	.650	3.72	29	.591	3.57	226	.644

自分の子ども以外の子とも親しくなれる	3. 26	192	. 828	3. 69	29	. 541	3. 32	221	. 809
保護者が保育士に話しかけやすくなる	3. 39	197	. 798	3. 55	29	. 948	3. 41	226	. 818
保護者が保育園に親しみがわくようになる	3. 51	197	. 652	3. 83	29	. 602	3. 55	226	. 653
保育士に子育てなどの相談をしやすくなる	3. 11	197	. 906	1. 66	29	1. 233	2. 92	226	1. 068
保護者が子どもの成長した姿が見られる	3. 47	197	. 824	3. 59	29	. 867	3. 48	226	. 828

(2) 職員のキャリアと保護者への対応

質問Ⅱ-3.「家庭に対する取り組み」に関する8つの項目と調査協力者の保育士としての経験年数（就任から5年未満と5年以上）別に平均値および標準偏差（そう思う=4、どちらかといえばそう思う=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1で計算）を出したところ、図表4の結果となった。総じて保育士は家庭に対して積極的に働きかけている様子が見られたが、特に「降園時などに、保育士と子育てに関する話をしてい

る。」「保護者から、子育てに関する愚痴を聞くことがある。」「保育士から、子育ての相談の助言をもらうことがある。」において大きな差がでた。 χ^2 検定を行ったところ、「保護者から、子育てに関する愚痴を聞くことがある。」の質問のみ有意な結果がでた（ $\chi^2=8.938$, $df=3$, $p<.05$ ）。保育士としての経験が5年未満の保育士も保護者に対して積極的に働きかけを行うものの、子育て相談につながるようなかわりには、経験年数5年以上でないと難しいということが示唆される。

図表4：職員の家庭に対する取り組み（保育士としての経験年数別）

保育士としての経験年数	5年未満			5年以上		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差
保育士は登園時や降園時に保護者との挨拶を積極的にしている。	3. 75	24	. 442	3. 93	29	. 371
子どものクラスを担当する保育士は私の顔を覚えている。	3. 92	24	. 282	3. 93	28	. 262
連絡帳を通して、子どもの日中の様子について知ることができる。	3. 74	23	. 541	3. 55	22	. 963
降園時などに、子どもの日中の様子について知ることができる。	3. 71	24	. 464	3. 61	28	. 497
降園時などに、保育士とかかわりのない雑談をしている。	2. 55	22	1. 143	2. 55	29	1. 021
降園時などに、保育士と子育てに関する話をしている。	2. 92	24	. 830	3. 34	29	. 670
保育士に、子育てに関する愚痴を言うことがある。	2. 43	23	. 945	3. 17	29	. 928
保育士から、子育ての相談の助言をもらうことがある。	3. 00	24	. 780	3. 57	30	. 568

(3) 保育士の自由記述に見る保護者との信頼関係に関する認識

質問Ⅲ「保育所と家庭の関係をよりよくしていくためにはどのような取り組みが有効だと思いますか。自由にお書きください。」には、調査協力者54人中45人に回答いただいた（回答率83.3%）。

回答内容の分析にあたり、テキスト分析ソフト（KH Coder 2.00e）を使用した。分析方法は樋口（2014）を参考にした。出現回数5回以上の結果は図表5の通りで

ある。出現回数2番目の「伝える」に関して前後の単語について分析（コロケーション統計）したところ、「様子」「取り組み」「内容」などの保育の様子を意味する言葉と「関係」「アドバイス」「意見」「仕方」などの子育て相談の内容に関する言葉が多く見られた。記述内容には、日々の保育内容や子どもの様子について保育士が意識して「伝える」ことで、保育所と家庭の関係がよりよくなると考えていることが示唆された。

さらに上記の整理をもとに記述内容のオープンコーデ

ィングを行った。これらのコードをKJ法の手法を参考に整理し、図表6の通り、分類を行った（回答内容内に複数の要素が含まれているため、回答数と分類数は一致しない）。この分類から、職員は「送迎時等日々のかかわり」や「行事」の機会に、保護者とのかかわりを持つ

と認識していることがわかる。またその際に伝える内容としては、先ほどの分析にも表れていたように、「保育内容の伝達」をしていくことが家庭との関係をよりよくしていくための取り組みであると認識していることがわかる。

図表5：自由記述における言葉の出現回数（保育士のみ）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保護者	34	話す	9	意見	5
伝える	18	イベント	8	関わり	5
様子	15	家庭	8	作る	5
思う	14	子育て	8	子ども	5
職員	14	保育	8	時間	5
良い	14	挨拶	7	相談	5
母	13	園	7	大事	5
行事	11	知る	7	大切	5
日々	11	一緒	6	普段	5
保育園	10	参加	6	聞く	5
話	10	子供	6	理解	5
関係	9	声	6		

図表6：自由記述の整理（保育士のみ）

大分類	小分類	回答数
手段	送迎時等日々のかかわり	19
	行事の活用	18
	連絡帳、掲示の活用	3
	保護者と保育士の情報の共有	2
方法	保育内容の伝達	12
	保護者を理解する	9
	保育士同士の連携、情報共有	4
	保護者支援の専門性の獲得	3
	保護者の保育への理解	2
	保育の充実	1
	保護者同士が仲良くなる	1

調査協力者の保育士としての経験年数ごと、および保護者の回答内容を特徴付ける言葉を抽出（Jaccardの類似性測度を使用）したところ、図表7の結果となった。保育士としての経験年数ごとに記述の内容が異なることが明らかになった。保育士としての経験年数が5年未満の職員は「保護者」、「家庭」、「様子」が回答を特徴づける言葉として上位となった。これらの言葉の前後の単語について分析したところ、保護者に対して保育の様子を

伝えるとともに、家庭での様子について情報を得ることが重要であると認識している様子がうかがえた。経験年数が5年以上10年未満の職員については、「一緒」「支援」「勉強」が上位となった。5年未満の職員と比較して、保護者との関係性をより近いものにすることの重要性を認識している様子がうかがえた。さらに専門性を高めるためには職員自身が勉強していく必要があるとしている。10年以上の職員については、「大切」「知る」「様子」「伝

える」が上位となった。子どもの成長や保育の様子などの保護者への伝達内容や方法について、経験による明確な根拠を持っている様子がうかがえた。

保護者については、「親子」「今」「懇談」が上位となった。「親子」共に保育士と「懇談」など行事等におい

てかかわりを持つことなど、これまでの取り組みを「今」まで通じ続けることを望んでいる。今回の調査に協力いただいた保護者が、保育所に対して好意的な方から選ばれたことが影響していると考えられる。

図表7：自由記述内容を特徴づける言葉（保育士および保護者調査）

保育士			保護者
5年未満	5年以上10年未満	10年以上	
保護者 .353	一緒 .300	大切 .235	親子 .250
家庭 .261	支援 .250	知る .235	今 .222
様子 .222	勉強 .250	様子 .217	懇談 .222
話 .217	話す .231	伝える .217	思う .211
話す .208	保護 .222	母 .200	サークル .200
イベント .174	相談 .200	行事 .182	イベント .143
保育 .160	作る .200	良い .174	職員 .125
職員 .160	思う .188	思う .174	超える .125
保育園 .160	良い .188	子ども .167	取る .125
連携 .143	大事 .182	参加 .158	生かす .125

数値はJaccardの類似性測度

具体的な回答内容の中には、「行事などの機会を通して保護者との関係は密接になる。それが日々のかかわりにも影響している。」との意見があった。「イベントサークル」についても、「参加したい企画に保護者は来ているので生き生きとしている。」「保育園主催だと保育士は仕事に追われて保護者と話をする時間を持ちづらいが、保育園と保護者の協力により開催することで、余裕を持って保護者と話ができる。」とのことであった。また、保育士自身の子育ての体験を生かしているといった内容も見られた。例えば自由記述の内容として「私が知りたかったので伝えています。」などの記述である。保護者として知りたかったから、きっと保護者もこの情報を知りたいであろうと保護者の立場でかかわりを持つという内容も数人見られた。

6. 考察

(1) 保護者主催行事と保育所主催行事

今回調査対象とした保育所におけるそれぞれの行事に対して、ネガティブな要素である「保護者の負担になる」1つを除き、保護者、保育士ともにその他の質問の評価は概ね平均3以上であり、高くでた。行事が保護者にとっても保育士にとっても肯定的に受け取られている状況が確認された。ただし、行事の主催が保護者か保育所かによって多少の違いが見られた。

保護者主催行事において「保護者が楽しめる」、「園児が楽しめる」、「保護者同士が仲良くなる」の評価が高かった理由としては、保護者自身がやりたいことを行事としていたことと、保護者が主体的に行事運営に取り組んでいたことが関連していると考えられる。保護者主催行事の多くは自由参加であり、その行事内容から保護者は参加、不参加の判断をする。つまり取り組みたい内容だからこそ、保護者も子どもも楽しめるということである。行事に対するモチベーションが高いことから、他の保護者との交流も盛んになりやすい。

保育士が「子どもの成長した姿が見られる」は保育所主催の行事において高かったが、運動会や保育参観などの行事の特殊性に加え、保護者は見ているだけで良いからなどの理由が考えられる。保育士からは、保護者主催の行事は保護者の方々が動いてくれるために保育士は比較的時間の余裕があり、保護者とゆっくりかかわることができるとのコメントがあった。有意差は出なかったものの、「保育士に子育てなどの相談をしやすくなる」について、保護者主催行事が3.33、保育所主催行事が2.77と多少差が出ていた背景にはこうした保育士の時間的、精神的な余裕の有無が影響している可能性がある。

(2) 保護者と保育士の行事の捉え方

保護者と保育士の行事に対する認識に関しても若干の差が見られた。「保護者が楽しめる」、「保護者同士が仲

良くなる」、「保育士に話しかけやすくなる」、「保育園に親しみがわく」については既述した通り、有意差が確認された。保育士が考えている以上に保護者は行事を肯定的に認識していることが明らかになった。日々の送迎時に保護者は、出勤や夕食などの家事などを意識してしまい、時間的余裕がない中で保育士とかかわることとなる。行事では、そうした制約がなく余裕のある中で過ごすことができることが一因と考えられる。

「子育ての相談をしやすくなる」については、上記の質問とは逆に保育士が認識しているほど保護者は肯定的に捉えていなかった。保育所調査の自由記述において、保育士は行事をやることで保護者と保育所との間に信頼関係が形成できると考える傾向があったが、その具体的な方策についての記述は見られなかった。行事を行うことで保育所との関係性が深まる傾向にあるものの、それを子育ての相談につなげていくためには、さらなる取り組みが必要となる可能性がある。

(3) 保育士の経験年数による保護者への関わり

保護者のかかわりに関する保育士の経験年数ごとの違いについては、経験年数5年未満と5年以上に分けて分析を行ったところ、子育てに関する保護者との会話については、5年未満の保育士は少ない傾向が見られるが、「保護者から、子育てに関する愚痴を聞くことがある。」のみ有意な結果がでた。「愚痴」は、特に親密な関係において発せられると考えられる。5年未満の保育士も5年以上の保育士同様に、挨拶や情報伝達などにおいて積極的なかかわりを持とうと取り組んでいるものの、関係性を深めるという点においては、保育経験の要素が大きいと考えられる。先行研究（中谷ら2014）においても経験年数が長い方が、保護者の気持ちに配慮した対応ができ、また保護者と関わり合う機会が多く、保護者との信頼関係を築きやすいとの結果がでているが、今回の調査においてもそれが確認されたと考えられる。保護者との関係形成には、現場での経験年数が大きく影響する。

自由記述の内容における経験年数ごとの分析では、保育所と家庭の関係をよりよくしていくための取り組みに関する認識の違いが明らかとなった。5年未満の保育士は保育内容や子どもに関する情報を保護者に伝えることで信頼関係が構築できると考えているのに対して、5年以上の保育士は保護者の様子に応じて適切な対応をすることが重要であると考えているとの傾向が見られた。全国保育士養成協議会（2013）の研究でも明らかになっているように、保育士としての専門的知識・技能は段階的に獲得されていくことがこの結果に影響していると考えられる。また、吉田ら（2015）の研究にもあるように、保育士自身の子育て体験が保護者とのかかわりに影響を与えていることも考えられる。保育現場の経験を重ねていく中で、保護者の気持ちに寄り添うことができるようになると、保護者との関係も深まり、信頼関係の構築に

つながると考えられる。

7. 結論

保育所が保護者との信頼関係を形成していくための方法として行事は有効な手段の一つであることが本研究により明らかになった。ただし、単に行事を行うことで関係が構築されるのではなく、保護者を行事にどのように主体的に参加させていくかが重要である。「イベントサークル」のように保護者主催で保育所が支援する形態の行事は、その点で有効であり、行事を通して保護者と連携・協働していく関係性を構築することが可能になってくる。もちろん行事のみでこうした関係性が構築できるのではなく、日頃から保護者とのかかわりに対して積極的に行うことや、保育士の経験年数に応じた適切な（無理のない）かかわりが重要になると考えられる。また、経験年数を重ねる中で、保護者の気持ちに寄り添うことができるようになることが、保護者との信頼関係の構築に有効であると考えられる。

本研究における調査は、調査対象が調査対象数においても、対象地域においても限定されていることから、本研究結果が一般化されるものではない。特に保護者調査に関しては、その規模が少ない。保育所に勤務する保育士および保育所を利用する保護者の傾向として研究結果を捉えることが適切であると考ええる。今後、さらに大きな規模の調査を行うことにより、保育所で行う行事などの取り組みが保護者との関係形成に与える影響を明らかにしていく必要があると考えられる。

8. おわりに

本研究では、保育所が保護者との信頼関係を築くための行事に焦点を当てた。そこに至る背景には、現場における保護者との関係形成の難しさがある。保育サービスが日本の子育て家庭において必須のサービスとなり、誰もが当たり前のように利用するようになってきた。保護者は一つの権利として保育サービスを利用するようになり、保護者の要求は幅広いものとなってきた。しかしながら保育ニーズが多岐にわたることで、保護者とのコミュニケーションは十分に取れなくなり、保育に関する認識のズレが誤解を生むことも多くなってきた。子どもたちが安心して過ごせる暮らしの場や適切な教育を提供するのが保育所の役割ではあるが、保護者との連携はそれらを保証する上で重要な事柄である。そこで着目したのが「イベントサークル」である。調査対象となった保育所で行われていた「イベントサークル」は保護者の保育所に対する信頼感の構築に大きな役割を果たしていたように感じられた。実際に福祉サービス第三者評価における保護者アンケートにおいても「イベントサークル」を実施していた保育所は保護者からの信頼において高い評価が得

られていた。

我々は「イベントサークル」がどのような影響を保護者の方々に及ぼしているのかに関心を持ち、研究を始めた。調査結果は既に示したとおりであるが、研究を進めていく過程において、「イベントサークル」が開催されていない保育所においても、園児によって組織されているサッカーチームのお手伝いなど、保護者が主体的に取り組める役割を提供することで、自分の子どもだけでなく他の家庭の子ども達にも関心を持つようになったこと、そしてそれが保育所への信頼関係の形成に寄与している可能性が高いと思われることなどの意見交換を行うことができた。「イベントサークル」でなくても保護者が役割を担える場を保育所が提供することは、子育てを生き生きとしたものに変える可能性があると思われる。今後は、保護者に対する日々の声かけだけでなく、保護者が活躍できるためには何が保育所として可能かなどに関しても検討する必要があるであろう。

お忙しい中、アンケートにご協力いただいた保護者の方や保育士の方々のおかげで研究をまとめることが可能となった。また、本稿には詳細を載せることができなかったが、本研究に関して客観的な立場からご意見をいただくことと、アンケート項目の内容に関する確認にご協力いただくことを目的に、ある保育所の訪問をさせていただいた。この場を借りて、お忙しい中、ご協力いただいたことに感謝を申し上げる。

文献

- ・ 亀崎美沙子 (2015a) 保育士養成課程における「保育相談支援」の教授法に関する検討：保育相談支援の一形態としての連絡帳に着目して、松山東雲短期大学研究論集 (45), 1-9.
- ・ 亀崎美沙子 (2015b) 保育相談支援の困難性に関する要因の検討—保育所保育士の感じる保護者とのかかわりの難しさを手がかりに—, 第1回サクセス保育・幼児教育研究懸賞論文.
- ・ 須永進、青木知史、齋藤 幸子、山屋春恵 (2010) 保護者の保育ニーズとその対応に関する研究 (1), 医療福祉研究 (6), 89-110.
- ・ 住田正樹、山瀬範子、片桐真弓 (2012) 保護者の保育ニーズに関する研究—選択される幼児教育・保育—, 放送大学研究年報 (30), 25-30.
- ・ 全国保育士養成協議会 (2013) 平成24年度 専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査」—養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性.
- ・ 中井大介、庄司一子 (2006) 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因, 教育心理学研究 54, 453-463.
- ・ 中平絢子、馬場訓子、高橋敏之 (2014) 信頼関係の構築を促進する保育所保育士の保護者支援, 岡山大学教師教育開発センター紀要 4, 63-71.
- ・ 林悠子 (2015) 保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義, 保育学研究 53 (1), 78-90.
- ・ 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版.
- ・ ベネッセ教育総合研究所 (2015) 第5回 幼児の生活アンケート 速報版
- ・ 松尾寛子 (2014) 在園児と保護者に対する子育て支援を見越した関係構築のあり方についての基礎的研究～保育所等における登降園時の子どもの預かり方と返し方について～, 神戸常盤大学紀要 (7), 1-8.
- ・ 松尾寛子 (2015) 子育て支援を見越した保育所における保護者との連携方法について—H県における保育所の送迎方法についての調査とある市における送迎保育ステーション事業について—, 神戸常盤大学紀要 (8), 17-27.
- ・ 吉田満穂、片山美香、高橋敏之、西山修 (2015) 保育経験年数からみた気付き体験の特徴, 岡山大学教師教育開発センター紀要 5, 9-18.